

博士論文要旨

学籍番号 08D012
氏名 鳴井 ひろみ
研究指導教員 小島 操子 教授

論文題目

外来がん化学療法を受ける患者の主体的な療養生活を支援するための心理教育的グループ
介入プログラムの開発

I. 研究目的

本研究では、外来がん化学療法による身体的、心理・社会的に類似の問題をもつ患者が相互作用の中で自らの問題を自分たちで解決し、主体的な療養生活を送ることを支援するための心理教育的グループ介入プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とした。

II. プログラムの開発

予備調査の結果と文献的考察を基にプログラムの目的や構成要素および働きかけなどを検討した。プログラムの目的は、「外来がん化学療法を受ける患者が社会的存在として意識的に社会的関係を結びながら、病気や治療を適切に受け止め、さまざまな療養生活上のストレスへの対処能力を向上させ、身体的、心理・社会的に安定した状態で主体的な療養生活を送ることができる」とした。構成要素は、適切な認知、情緒的安定、対処能力の向上、ソーシャルサポートの獲得とし、働きかけは、認知的支援、情緒的支援、教育的支援、社会的支援とした。介入は、グループ介入とし、週1回の5回のセッションで、1回のセッションを2時間とした。

III. プログラムの効果の検証

外来がん化学療法を受ける患者にプログラムを適用し、それを適用した群（以下適用群とする）の介入前・後における適応の状態と、適用群とプログラムを適用しない群（以下非適用群とする）の適応の状態を比較検討した。

対象：

適用群および非適用群の対象は、某総合病院において外来がん化学療法を継続して受けながら療養生活を送っている患者で、それぞれの研究の同意が得られた者とした。

プログラムの適用方法：

開発したプログラムを研究の同意が得られた患者14名（適用群）を6～8名の2グループに分けて適用した。プログラムの実施に際しては、その効果を高めるために多職種の専門職者と連携して行った。

データ収集：

適応の状態を比較検討するために、測定用具は、既存の日本版POMS、日本版 MAC、がん薬物療法におけるQOL調査票と、研究者が作成したソーシャルサポートに関する質問票および身体症状に関する質問票を

用いた。測定は、適用群は介入開始前と全介入終了直後および介入終了1ヶ月後に、非適用群は適用群と同時期に、3回行った。尚、ソーシャルサポートおよび身体症状に関する質問票は、さらに介入第3セッション終了後を含む4回行った。また、適用群においては、介入前・後の対処過程の変化について、半構成的質問紙を用いて面接を行った。また、プログラムの有用性と実用性を検討するためにプログラムの内容および方法、実施時期および回数などと参加者の負担感などに関する質問票を作成し、全介入終了直後に回答を得た。

分析方法：

適用群および非適用群の介入前・後の得点について、反復測定一元配置分散分析を行った。両群の対象者の背景はt検定または χ^2 検定し、両群の介入前の得点については、t検定した後、反復測定二元配置分散分析を行った。質的データは、質的帰納的に分析した。

結果：

<対象者の概要>対象者は適用群10名、非適用群12名の計22名で、平均年齢は適用群62.9歳、非適用群56.8歳だった。年齢、病期、PS (Performance States)、外来で化学療法を開始してからの期間などは両群に有意差はなかったが、職業について有意差が認められた。**<適用群の介入前・後における適応の状態>**：プログラム介入前・後の適応の状態は、以下の項目において、介入開始前に比べて介入終了直後または介入終了1ヶ月後において有意に改善した。それらの項目は、身体状態では、症状の程度、生活の支障、情緒状態では、不安・緊張、怒り・敵意、混乱、抑うつ・落ち込み、疲労、対処能力では、絶望的な態度、予期的不安、ソーシャルサポートでは、情動的サポート、評価的サポート、そしてQOLでは、精神・心理状態、社会性、総合的QOL、QOL合計得点であった。**<両群の適応の状態の比較>**適用群と非適用群の適応の状態は、情緒状態の怒り・敵意 ($p=0.033$)、混乱 ($p=0.027$)、疲労 ($p=0.025$) において、有意差がみられた。情緒状態以外の身体状態、対処能力、ソーシャルサポート、QOLについては、適用群は非適用群に比べて、介入後に改善傾向にあったが、有意差は認められなかった。**<プログラムの有用性・実用性>**プログラムの有用性では、参加者全員がこれからの生活を送る上で役立つと回答し、また、プログラム実施に参加した専門職者も全員が役立つと回答していた。プログラムの実用性については、参加者および実施に参加した専門職者ともに、ほぼ全員負担がないと回答していた。

IV. 結論

以上のことから、本プログラムは、外来がん化学療法を受ける患者が主体的な療養生活を送ることができするための系統的・継続的な心理教育的グループ介入プログラムとして効果があることが検証され、プログラムの有用性および実用性が高いことが認められた。

博士論文審査の結果の要旨

学籍番号 08D012
氏名 鳴井 ひろみ
学位授与年月日 2011年3月14日

論文題目

外来がん化学療法を受ける患者の主体的な療養生活を支援するための心理教育的グループ
介入プログラムの開発

論文審査担当者 委員長 木下 幸代 教授
委員 飯田 澄美子 教授
委員 市江 和子 教授
委員 藤本 栄子 教授
委員 小島 操子 教授

本研究は、外来がん化学療法を受ける患者への心理教育的グループ介入プログラムを開発し、その効果を検証したものである。

研究者は、長年、がん患者の療養生活の支援に取り組んでおり、入院治療から外来・在宅医療へという医療情勢の激変のなかで、先行研究の検討および予備調査を綿密に行い、外来においてがん化学療法を受けながら患者自身で管理することを余儀なくされている人々を支援するための心理教育的グループ介入プログラムを開発した。このプログラムは、ストレス・コーピング理論とソーシャルサポート理論を基盤として、さまざまな支援を組み合わせグループ介入により、類似する問題をもつ患者が互いに学習し話し合う中で自らの問題を自分たちで解決し主体的な療養生活を送ることを支援するという画期的な内容であり、高く評価できるものである。また、適用の過程において、量的データと質的データの両面から詳細に収集・分析し、その効果を検証したことは、研究者の粘り強い努力の賜物である。プログラムは、綿密な準備のもとに多職種の専門職者と連携・協働して実施され、参加したがん患者および実施に関わった専門職者から有用性・実用性に関する高い評価を得ており、新たな実践方法として臨床への活用が期待される。本プログラムは、研究成果の臨床への貢献において、がん化学療法を受ける患者のみならず、地域において自ら問題に対処しながら療養生活を送る人々の支援を考える上で大きな貢献をするものとする。

以上の結果から、審査委員会委員全員により、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認められた。